

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19720006  
 研究課題名（和文） リハビリテーションとしての現象学

研究課題名（英文） phenomenology of rehabilitation

## 研究代表者

稲垣 諭（INAGAKI SATOSHI）  
 東洋大学・文学部・助教  
 研究者番号：80449256

研究成果の概要：中枢神経系に障害をもつ人々に対するリハビリテーション医療を、現象学的観点から構想し直すためには、人間を、脳、身体、意識といった三つのシステムからなる複合連動系として理解する必要があり、この複合連動系の特質およびそれらの連動モードの探求とそれに対する効果的な治療組み立てが、リハビリテーションの最重要課題となる。そのさい、現象学的なアプローチをリハビリの治療プロセスに柔軟に組み込むために、認知神経リハビリテーションを治療-探究プログラムとして設定すると同時に、現象学それ自身の探究プログラム化も行っておく必要があった。当研究によって行われた、いくつかの統制方針の設定と、仮説的記述の構想手順の明確化によって今後、リハビリテーションおよび経験科学の進展に親和的な哲学的アプローチが可能になると予想している。

## 交付額

（金額単位：円）

|      | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|------|-----------|---------|-----------|
| 19年度 | 1,000,000 | 0       | 1,000,000 |
| 20年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 年度   |           |         |           |
| 年度   |           |         |           |
| 年度   |           |         |           |
| 総計   | 2,000,000 | 300,000 | 2,300,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：現象学、リハビリテーション、探究プログラム、中枢神経系障害、自己組織化

## 1. 研究開始当初の背景

80年代以降の脳神経科学の急速な発展に伴い、再度、人間の意識経験を解明しようとする動向が高まりつつある。最近話題のクオリアもそのひとつであるが、こうした動向の背後には、薬物治療だけでは回復の見込みがない患者が多数残されたままであるという深刻な事実も存在する。その中には、統合失

調症や自閉症、脳血管疾患（脳梗塞、脳出血等）により生じる身体麻痺、失行・失認といった認知症を併発する高次脳機能障害、高齢による痴呆、幼児脳性麻痺といった精神的にも身体的にも障害をもつ患者が多数含まれており、治療にさいしては、彼らが引き受けざるをえない「意識」という一人称的経験をもはや無視しえないことが認知され始めて

いる。とはいえ、中枢神経系リハビリテーションの臨床の現実では、患者の障害の評価が数量的メソッドで行われており、患者の「意識経験」を効果的に評価することができない。そのため、現象学的な補助を得たりハビリの探究プログラム化が必要であると思われた。

## 2. 研究の目的

リハビリを経験科学化するために、まず最初に現象学それ自身のプログラム化を行い、経験科学に親和的な探究展開モデルを構築することが必要になる。それにより、哲学者だけでなく、治療を行うセラピストも患者のどこに介入すればよいのかの現象学的手がかりを与えることになる。というのも、このプログラム化によって、みずからの現象学的探求が前進しているのか、あるいは停滞しているのかを、経験諸科学の成果と照らし合わせながら検証することが可能になるからである。現在、リハビリテーションが実施されている各病院の臨床施設で勤務する理学・作業療法士といったセラピストは、国家資格を取るさいに、解剖学、生理学、運動学、神経内科学、整形外科学といった理論を一通り習得することが必務となっている。どれもが実証科学のデータエビデンスに裏打ちされた理論構想であり、そこには、現代哲学の一派である現象学が介入する余地は本来ない。現象学の出自が、そもそもこうした実証科学の方法論への批判のうちであり、特に「意識」という数値データの取りにくい領域で本領を発揮する現象学が、これまで実証科学との接点をもたなかったことには十分な理由がある。それゆえ、現象学と経験科学とを接合する試みには、「哲学」としての現象学が払うべき犠牲がないわけではない。にもかかわらず現段階では、その犠牲に見合う以上のものを獲得できると考えている。これまで継続的に続けられてきた、テキスト読解にのみ基づく現象学研究が、そもそも「哲学」として、前進運動を成しえているのかには大きな疑問がある。ここ10年という短いスパンから見ても、現象学探求に新たな問いの設定という分岐点が出現したようには思えない。したがって、プログラム化を首尾よく行うことで、多様な経験フィールドに現象学者みずからが歩み出て、みずからのプログラムを吟味する機会を得ることは、現象学研究にとってまたとない好機を生み出す。

また当研究は、「認知運動療法/認知神経リハビリテーション」の臨床経験を土台とする。それはつまり、患者の回復を、意識・身体・脳神経の複合的・全体的システムの回復として、つまりそれぞれが固有に自己組織化する系として扱うということであり、いまだ偏見の根をもつリハビリテーションを学問とし

て再構築することでもある。さらに一人称的経験に迫る方法として、現象学的な意識内観の記述モデルを採用することで、患者の多様な意識・身体状態からそのつど必要な治療方法が見出され、それにより障害区分がおのずと決定されるような判定モデルの提起を最終的に目指す。例えば、脳神経組織の再生にかかる時間は、脳梗塞等という障害原因だけではなく、患者の生理・器質的特性、損傷部位、年齢、性別、さらには意識の度合いや人格のあり方によって大きく異なる。しかもその再生度合いは、治療を通じて初めて検証されるのであり、外形的な判定はあくまでもおおよその目安に過ぎない。したがって、本来的な障害のあり方は、多重的なスカラーのもとで初めて決定されるべきであり、その際、患者の障害意識の回復が何よりも優先されて良いはずである。当研究が最終的に目指すのは、実際の臨床現場および患者に必要とされている、多様な症例に柔軟かつ包括的に対応できる治療モデルおよび支援システムの構築である。

## 3. 研究の方法

多くの臨床現場を経験し、最新の経験科学的知見も吟味することで、セラピストの手がかりとなる意識の特質を現象学的に捉え、探究プログラムとして展開する。以下、当課題を実行した際の方法的手順を記しておく。

1) 臨床の立ち合いおよび臨床データの獲得を通して、健常的な現象学者では気づきえない意識ないし身体の特質へとまなざしを向けるための絶好の機会が与えられる。それにより、従来の現象学的記述に修正、訂正、改良の余地が生まれる。

2) それに伴い、現象学としてのみずからのプログラムがはたして展開しているのか、行き詰っているのかを判定するための外的・内的基準がおのずから出現するようになる。このことが、現象学と経験科学とのある種の接合点を示すことにもなる(探究プログラム)。

3) この接合点を軸に、理学・作業療法セラピストといった医療現場の経験科学者に対して、これまで見落とされてきた意識経験、身体経験の現象学的記述にアクセスする通路を開くことになる。そうした現象学的経験が、実際の治療現場に取り込まれ、実践されることにより、臨床への立ち合いをする現象学者は、現場から新たなデータを獲得することができ、それにより現象学的記述をさらに改良することが可能になる。

以下、～が前進的に反復される。

## 4. 研究成果

認知運動療法を実践場面で展開するためのプログラムの条件性を現象学的視点から

取り出す試みを行った。セラピストが、認知運動療法を実践するには、身体の筋組織や関節・骨格についての生理学的・整形外科的知識だけではなく、脳神経科学の膨大かつ最新の知見が必要になる。しかもそうした知見はあくまでも必要条件であって、十分条件ではない。患者の意識プロセスを治療場面で重視する認知運動療法では、そうした知見に加えて、個々のセラピストが、臨床場面においてみずからの「現象学的経験」を絶えず拡張するよう要求される。そのさいの「現象学的まなざし」は、文献学習によって習得されるものではない。そうではなく、個々のセラピストが臨床経験を積み、治療改善を行っていくなかでのおのずと身につけていくところがあり、そこには個人的資質、文化土壌、社会制度といった不確定要素が多分に入り込む。そしてここに問題の根がある。つまり、患者の身体および脳組織の創発を誘導する「形成的治療」は、それを使えば誰もが、同程度の治療効果を期待できるようなものではない可能性が高い。これが、形成的場面に含まれる最も厄介で、困難な点である。より正確に言えば、認知運動療法は、その受容のされ方が示しているように、もともと確固たる「治療法」ないし「理論」として整備され、精緻にマニュアル化され、伝達されるような性格をもっていないということである。ペルフェッティが、患者が生きている「意識の現実」へと踏み込む決断をしたときから、このことは半ば必然であったように思える。ただしこれは、決して消極的なことではない。自己組織化を理論に組み入れる構想には、不可避免的に生じてしまう事態である。したがってむしろ重要なのは、認知運動療法には、さまざまな文化土壌において多くの変形をともないつつも、それ固有の展開可能性を発揮できるような仕組み（コアユニット）が当初より備わっていたということであり、そのあり方を積極的に受け入れ、展開し続ける必要があるということである。このことは、認知運動療法の「科学性」にかかわる、避けては通れない問題であると予想しており、そのため固有な探究プログラムとしてリハビリを再考することが急務なのである。

従来の現象学的身体論の多くは、フッサーやメルロ＝ポンティのテキスト解釈的研究を主として行われてきた。とはいえ彼らは、当時の経験科学の成果に精通しつつ、自らの現象学的記述を繰り返し吟味する手順を踏んでいたのであって、テキスト解釈やその正当性を競ってはいなかった。問題は、事象としての身体であり、自然的態度では透明になっている身体経験の発見と拡張である。80年代以降、経験科学は認知科学や脳神経科学を筆頭に多彩な展開を遂げている。ということ

は、そうした科学の水準に見合うような『イデーン』や『知覚の現象学』の更新も可能なのである。確かに看護やケアという臨床場面でメルロ＝ポンティやハイデガーを見直す試みは行われている。しかしここでは、人間身体の特質を新たに発見するというより、間主観性や間身体性の形成基盤を健常者と障害者、患者と医療従事者という関係性の差異から再確認することが目指されている。そこで本研究では、そうした場面とは異なる臨床経験を土台に、身体能力の拡張を照準とする現象学的探究プログラムの設定を試みた。それにより、哲学研究者だけではなく、セラピストや芸術家といった他分野の人にとってもプログラムの発想の重要性が示されたと予想している。

プログラムにはコア（統制原理）と仮説的記述により成立し、その際のプログラム展開の吟味基準は以下のようなものとなる。1) 自らの現象学的経験に内的であり、それまでの経験可能性の幅に変動が生じるかどうか、2) プログラムの参加者にとっても経験形成的であり、その記述が共有可能となるかどうか、3) 記述とともに次の課題が現れ、探求が持続可能になるかどうか、4) 現行の経験科学的な理論や事例との整合性がどの程度とれ、かつ他の経験科学者の探求の手がかりとなりうるかどうか。これら要件の1)3)が現象学を実行する際の最低必要条件であり、2)はプログラムの必要条件である。4)は、経験科学の成果を足がかりに現象学的経験の誘導と拡張を促す外的指標である。特に1)と3)の協働は、新たな経験領域の発見、そこでの対象や概念、機能モードを細分化していく際に不可欠となる。

例えば1)だけを満たす場合、経験は神秘体験のような特異点の一次的記述となり、誰にも理解されず、忘却されるか、黙殺される。ただし、あまりにも特異で強烈な経験である場合、その経験に記述が溢れ、一個の作品となることもある。また1)2)だけが満たされるような場合、共有経験の固有さだけが前面に出ることで同内容の論述が量産され、疑似宗教的な研究グループに近づく。3)だけを満たす場合、見かけ上探求は展開するが、経験に固有な問いが立てられていないため、文献から文献へと遡及する歴史学的な探求か、語源分析や論理分析に力点が置かれた神話や物語の創作となる。1)3)だけが満たされる場合、当人にとっての探求は展開し、記述の多産が前景化するが、プログラムは共有されず、外的に見れば一個の謎のようなものになる。多くの芸術家の試みもこれに近いところがあり、いずれ2)の要件が満たされる可能性に開かれている。これら1)~3)の要件は、そのつど4)の要件と照合される必要がある。こうしたプログラムの設定によ

て初めて、自己の経験の範囲外にある他の現象学者の記述を、体験的に変換することなく単に意味的に理解し、整合的に体系化する試みや、論理的な条件導出や語源的な意味づけによって配置する試みが、非現象学的なものとして展開可能性を失っていくことになる。

誰であれ自らが生きている現実を否定できず、誰もが同じ現実を共有していると信じて疑わない。とはいえ各自が同じ現実を生きていることの保証を、当の現実の内に見出すのはほとんど困難である。外見上おかしなところは一切なく、コミュニケーションも滞りなく成立している。にもかかわらず、ある者が全く別の実存を引き受け、自らの現実を生きていたことが判明することがある。現実という語は、認識の延長上では出会うことのない深みを備えている。この現実に対応するドイツ語は Wirklichkeit であり、そこには「働き(wirken)」という意味合いが含まれる。働きそのもの、例えば見る働きを見ることはできず、呼吸や消化の働きも同様である。にもかかわらず、働きがあることは紛れもなく分かり、そこに固有の現実が成立している。その限りで、Wirklichkeit は、res という物の特性に由来する実在性(Realität)には回収しきれない可能性を秘めた語でもある。しかし他方、リアリティないしリアルという語の現代的用法からも分かるように、実在性も単純に事物の特性には収まらない経験領域をすでに含んでいる。本研究では、本人が生きている現実に含まれるモードを取り出すことで、意識経験の解明にとどまらない、現実世界で行為する主体の分析が重要になることが示される。このことは、中枢神経系障害により、健常者とは異なる現実を生きざるをえなくなった多くの患者を捉えるさいにも不可欠な現象学的視点のひとつである。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

稲垣 諭：「行為と現実の現象学 フッサール、シェーラーの現象学的探求をてがかりに」、『実存思想論集』XXIV、実存思想協会編、2009年6月刊行決定、99-115頁【査読有】

稲垣 諭：「現象学の探究プログラム化 現象学の再立ち上げをめぐる」、『白山哲学』43号、東洋大学哲学科編、2009年2月、193-224頁【査読無】

稲垣 諭：「認知運動療法と現象学 形

成的治療の探求プログラム序説」、『認知運動療法研究』No.7、日本認知運動療法研究会編、2008年4月、61-78頁【査読有】

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

稲垣 諭 (INAGAKI SATOSHI)  
東洋大学・文学部・助教  
研究者番号：80449256

### (2)研究分担者

### (3)連携研究者